

中国青海省における貧困と観光

東 美晴

はじめに

2006年9月2日から6日のほんのわずかな間だが、科学研究費補助金研究「中国における底辺階級の実践的研究（代表：中村則弘）」の一環として、青海省を訪れる機会を得た⁽¹⁾。ここでは、観光の社会学・人類学的研究の側面から、中国における底辺層のあり方を捉える視角を模索する。

ところで、山下は1996年の時点で、観光の人類学的研究の意義について以下のように指摘している。

観光は世界資本主義システムの一部として展開されているわけだから、観光の研究は、当該社会だけに視野を閉ざすことができず、それをとりまいているマクロな社会体系—都市、国家、そして世界資本主義システム—をつねにその視界に取り込まなくてはならない。その意味で観光の民族誌は、ウルフ・ハナーツが言う地球規模の連関における「マクロ人類学」、あるいはアパドゥライのいう「マクロ・エスノグラフィ」を実践するための野心的な試みとなる。そうしながら、観光の民族誌は、世界資本主義というマクロなシステムと具体的に観光が展開されるホスト社会のミクロなシステムの「コンタクト・ゾーン」、あるいは接合点を研究することになるのである（山下, 1996, 10）。

実際、観光産業は、産業化されていない地域の伝統文化・伝統的生活・自然環境などを、対価を支払い見る価値がある対象と仕立て上げることで、世界経済システムの末端に組み込む近代産業であるという側面も内包している。中国においてもこれはあてはまる。たとえば、雲南省の景洪は、1997年の時点で観光収入が7.67億元（外国人観光客が落とす収入は6.82億である）、GDPの38.5%を占めるに至っている（劉, 2001, 42）。この数値だけでも、少数民族観光という観光対象の創造・実践が、西双版纳・景洪の社会・経

済に与えてきたインパクトの大きさが想像できる。

だが、ここで注目したいのは、観光客を受け入れるホスト側だけでなく、そこを訪れるゲストもまた、観光の経済システムの中へ、望む望まざるに関わらず組み込まれるということである。今回の青海における我々の調査行程そのものを、この観光の経済システムの文脈に置き、読み直してみたい。

そのための補助的議論として、以下に三つの議論A・B・Cをあげておく。

1. 補助的議論

(1) 議論A：疑似（模倣）体験としての観光

ダニエル・ブーアスティンが観光旅行を「疑似イベント」と位置づけたのは既に40年以上前のことである。葛野浩明はグレーバーンの類型の上に、疑似（模倣）体験として、90年代前半時点での日本の観光の類型化を試みる。ここでは、今回の調査に関連するものとして【援助ツーリズム】と【エスニック・ツーリズム】を葛野の文章そのままに示しておく(葛野, 1996, 127-128)。

【援助ツーリズム】戦場と並んで貧困や飢餓もまた、私たちにとって最後の非日常である。たとえばフィリピンのスモークマウンテンに佇めば、誰でも世界経済の構造的なひずみを痛感し、「貧困の文化」を観光することにとどまってはいられなくなる。必ずや援助体験が観光に含まれることになる（すでに欧米では「オルターナティブ・ツーリズム（もう一つの観光）」の1つとして【サポーターズ・ツーリズム】という述語が定着しつつある）。文化・社会的側面から人間の真理を追究する活動が《文化観光》だとすれば、【援助ツーリズム】は今後最も進展する可能性を秘めた《文化観光》の1つであろう。貧困や飢餓が最大の非日常でありながら、私たちは黒柳徹子という、国際的に高名であり、しかし大変に親しみやすい模倣の対象を持っている。この妙で皮肉すぎる構造にはいくら注目してもしすぎることはない（葛野, 1996, 127-128）。

【エスニック・ツーリズム】グレーバーンのいう〈民族観光〉とは自然と人間（文化）をつなぐ「大自然の子供たち」、言い換えれば「自然人」を観光する観光であった。しかし、〈民族観光〉は、その目的が自然への接近から徐々に「異文化」「異民族」へとシフトしていく。すなわち、「(異)民族」「異文化」が「発見されることで、初めて〈民族観光〉は本当の意味での〈「民族」観光〉になるのである、…。

日本での【エスニック・ツーリズム】の達人は本多勝一であり、本多の『カナダ＝エスキモー』『ニューギニア高地人』『アラビア遊牧民』は聖典とさえいえる。これら「極限の民族3部作」を本多の旅の順に読み進めると、そこに「大自然の子供たち」「自然人」から「民族」の「発見」へという、旅の精神史とパラレルな道筋が感じ取れること

は大変に興味深い（あくまでも私個人の読み方であって、本多の旅の意図とは無関係である）。

もちろん、人類学者も（『悲しき熱帯』のレヴィ＝ストロースのように優れた旅人であればだが）模倣の対象となるであろう。人類学者を「プロフェッショナル・ツーリスト」と呼ぶ傾向が明らかに強まっている（揶揄的・自嘲的表現として使われることも多いが）（葛野, 1996, 128）。

なお、葛野は援助ツーリズムに関する記述において「オールタナティブ・ツーリズム」という用語をあげているが、この言葉の顛末を橋本は、「近代とともに始まった「大衆観光」に対する批判として一九七〇年代から一九八〇年代はじめに「観光のもうひとつ別の形態」が提唱された。この標語は世界中から同意を得られるような魅力にあふれていたが、結局は「あり得ないものを実現しよう」とする内実のないものであった」とまとめている（橋本, 2003, 63）。

（2）議論B：階級、まなざし、世界経済システム

アーリは観光の嗜好として、「ロマン主義的まなざし」と「集合的まなざし」という概念を提示している。「ロマン主義的まなざし」は簡単には「すばらしい景色に対するエリート主義的（孤独主義的）見方」であり、「かなり文化資本が求められる見方」である。一方の「集合的まなざし」は大衆観光のまなざしである。「ロマン主義的まなざし」は、18世紀末から19世紀初頭におけるロマン主義の影響のもとに、観光が生成される過程において出現したものであるが、上流階級ばかりでなく、現在では中間階層を巻き込み、さらに広がっている。実際、ある種の観光客は、手垢の付いていないもの、本物を求め、より遠くへ出かけ、自分の体験を低俗な大衆観光と区別したがる。しかし、このような「ロマン主義的まなざし」も世界経済システムに組み込まれている⁽²⁾。以下、「ロマン主義的まなざし」が、いかに世界経済システムの中に組み込まれているかを示した部分の記述を示しておく。

開発途上国での観光の成長（ケニアでの「動物観光（ゲーム・ツーリズム）」、メキシコでの「民族観光（エスニック・ツーリズム）」ガンビアでの「スポーツ観光」など）は単に国内の社会変化の過程から生じたとはいえないということをおさえておくことが肝要である。こういう開発の可能性は多く外的条件からの帰結でもあるのだ。それはたとえば次のようなものだ。廉価航空券、コンピュータ予約システムなどの技術的変化。世界規模のホテルグループ（〈ラマダ〉）、旅行代理店（〈トーマス・クック〉）、個人向けの融資会社（〈アメリカン・エクスプレス〉）などの成長を含む資本の発達。ますます大衆観光のパターンから離脱したいと願う意味での「ロマン主義的まなざし」の倒錯の蔓延。

先進国の人が自分より後進の世界の文化習慣に抱くあこがれ。皆がまなざしを向ける場所を上っ面だけ経験する、本質的には場所の「収集家」としてのツーリストの増加。観光が大きな潜在的発展性を持つと判断し、また、促進もしたいという点で関心を持つ財力豊かな大都市の外野席の人の出現である（アーリ, 1990, 114）。

（3）議論C：オーセンティシティ（真正性、本物性）

オーセンティシティは観光という行為に価値や意味を与える装置であり、幻想である。そのため、観光人類学においては様々に議論されてきた。

①観光体験の真正性

オーセンティシティの議論は、まず観光客の体験に関する問題として提起される。山下がマッカネルの議論を簡潔にまとめているので、それを示しておく。

こうした観光経験のとらえ方は「オーセンティシティの追求」としての観光というディーン・マッカネルの議論につらなるものである。つまり、私たちは近代の疎外された世界に住んでおり、そこでは本当の自分を実現することができない。そこでもう1つの世界を求め、本当の自分を見つけ出そうと人は旅に出るというのである。そもそも住み慣れた家、あるいは田舎を捨て、都市へ出、自己実現をはかろうとした近代人とはその本性において「観光客」なのであって、マッカネルによれば、観光客の研究は革命の研究に匹敵する近代性の研究でもあるのだ（山下, 1996, 8）。

②文化の真正性

観光客の体験のオーセンティシティを保証するものは、観光対象のオーセンティシティである。すなわち、本物の体験とは本物を見る、本物に触れる体験だ、というわけである。だが、ここでオーセンティシティの議論は複雑になる。文化を観光対象とした場合には、なおさらである。

まず、文化はそれ自体が変化するものであり、一つの地域内においても多様なバリエーションを持つものである。そのため、代表性のあるもの、規範的なものを、その地域の本物の文化と措定することは可能だが、何をもって代表性・規範性とするのか、誰がその認定を行うのか、は恣意的にならざるをえない。一方で、その文化の担い手にとって現在継承されている形は、どのような変化を被っていようと、本物の筈である。だが、変化を肯定的に捉えるか、否定的に捉えるかによって、当事者にとっても、本物にもまがいものにも認識される。観光における舞踊などの伝統文化の上演が、自文化に対する誇りを取り戻し、アイデンティティの強化につながるといった文化の再生・創造に関する議論は、この部分に関わるものである。

しかし、橋本が指摘するように、観光を「(観光者にとっての)異郷において、よく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして売買すること」と定義するならば、観光対象となる文化は、観光客にとって商品価値を持つように、その地域の文化の一部を切り取って再構築された「観光文化」過ぎず、これに対しオーセンティシティを求めることなど意味はなくなる(橋本, 1999, 158)。

なお、橋本はタイ・モン族観光の事例および二つの中国貴州省トン族観光の事例の検討を行っている。この中では、より近代化が進んでいない辺鄙な村にオーセンティシティの高さを見いだす観光者と、より伝統が保持されているという認識のもとに、西洋人観光客をより辺鄙な村へ案内する観光ホストの例が示されている。また、舞踊や村の景観において民族テーマパークでのモデルとなることが、その民族の伝統文化としての代表性を付与し、オーセンティシティを高める例等がしめされている(橋本, 1999, 161-169)。ここから、まず、民族観光においては、近代化が進んでいないほど、伝統文化が保存され、オーセンティシティが高いとみなされる傾向があることがわかる。また、より辺鄙であることをアピールすることも、代表性を獲得することも、観光ホストにとっては、オーセンティシティの戦略的利用であることがわかる。観光ホストにとって、オーセンティシティの高さの主張は、観光ゲストの本物幻想をくすぐる、観光のブランド戦略なのである。

2. 青海省の観光産業

現代中国における観光産業は、改革開放後の外貨獲得策の一環として、外国人に対する開放地区を設定し、観光客誘致開始したことに始まる。西部10地域(陝西, 雲南, 四川, 新疆, 西藏, 甘肅, 重慶, 青海, 寧夏, 貴州)における省政府レベルでの観光産業育成への取り組みは陝西省の1985年が最も早い(劉, 2004, 38)。これは、中国が世界遺産条約を批准した年であり、1987年における秦始皇帝陵および兵馬俑坑の世界文化遺産指定を睨んでのことであっただろう。この間の1986年には、中央政府レベルにおいて観光規則の改正が行われ、7つの重点観光地区に対する政府からの直接投資などの施策が行われ、秦始皇帝陵および兵馬俑坑もその対象となっている(李, 2004, 344)。中央政府レベルにおいて、観光による外貨獲得政策を強化したことがうかがわれる。

この後、92年には雲南省が、93年には四川省が省政府レベルでの観光産業育成を決定していく(劉, 2001, 38)。また、90年代半ば以降の中国国内旅行者の増加傾向をも背景に(国内旅行人口は、92年まで2億から3億程度であったが、95年に6億、99年に7億を超え、2005年には12億に至っている)、1998年には中央政府が旅行業を「国民経済の新增長点」と位置づけていく。これを受け、多くの省・自治区・直轄市が観光産業の支柱産業としての育成を決定する。西部地域でも貴州省を除く9地域において、1999年ま

で、観光業育成に関するなんらかの決定がなされている(劉, 2001, 38)。付け加えると、1999年に提示された西部大開発戦略も、中国西部地域の観光開発に拍車をかけていることは言うまでもない。

そこで、今回の調査地である青海省へ焦点を移そう。青海省政府は1998年に「关于加快旅游资源開發的若干決定」を出している。だが、他の西部各省に比べると、資金援助、資金貸与等を欠く不十分なものである(劉, 2001, 38)。また、少し古くなるが『中国旅游統計年鑑2003』から青海省を訪れた観光客数を見ると、1995年13,300人、99年20,500人、2001年39,700人、2002年43,532人である。確かに観光客数は増加しているが、この数値は隣接する雲南(2002年1,303,550人)、四川(同667,224人)、甘肅(同236,812人)、西藏(同142,279人)と比べ、遙かに少ないものである。これらから、青海省の観光産業は、西部地域の中でも後発であり、未成熟であることは理解できる。

3. 青蔵探検旅游と調査日程

(1) 青蔵探検旅游

今回の調査は中国青海省登山協会を通して実現したものであった。現在、青海省登山協会は中国青海省国際体育旅行社を兼ねている。中国青海省国際体育旅行社社員であるZ女史によれば、青海省登山協会は、外国人登山者の管理と便宜のため1985、6年頃に発足したものであり、民間組織であると同時に、青海省政府による管理組織でもある。旅行社を兼ねるようになったのは1998年であるという。設立にこのような経緯があるため、中国青海省国際体育旅行社は一般の観光旅行を扱う旅行社ではなく、登山や探検など、特殊な旅行を扱う会社であることを強調する。これは、日本語における広義の観光は「旅游」であり、整備された観光地・観光施設を参観する旅行のみを「観光旅行」であるとみなす中国の、言葉の使い分けの事情も反映している。

(2) 調査プログラムの検証

資料1は青海登山協会から提示された我々の調査プログラムである。実際には、9月5日の調査はキャンセルし、市内での資料収集に当てた。また、筆者は6日には北京に戻らねばならなかったため、大通県の調査には参加しなかった。そのため、筆者が実質的に調査に同行したのはほんの2日間に過ぎない。

ところで、資料2は登山協会(国際体育旅行社)のパンフレットに記載されたツアープログラムの一つである。このパンフレット『青蔵探検旅游』には、登山探検、山間徒歩、江源探検、江河漂流、汽車旅游、自行車摩托車、宗教文化、観光旅游、節慶旅游、生態旅游、騎馬旅游の11項目に分類された、45本のツアープログラムが掲載されている。「青海風情之旅」は「観光旅游」の項目に分類されるコード番号QMA31のツアーである。

我々の9月3日、4日の予定と、「青海風情之旅」中の第4日、第7日の行程はほぼ同じである。我々の調査は、貧困地区にある家庭を訪ね、その状況についてインタビューすることがその内容であったが、「青海風情之旅」中の第4日の旅程には「藏族家訪」が組み込まれており、我々の調査とほとんど変わるところがない。異なる点があるとすれば、我々は2軒を訪問したことぐらいであろう。我々は調査者として、あれこれと立ち入った質問をしたつもりであっても、好奇心旺盛な観光客も藏族の生活文化や経済状況について、一定程度の質問はするのである。また我々は9月4日には、互助県にて土族の家庭二軒を訪問した。その一軒は、土俗風情の農家楽（農家料理を提供する休憩、宿泊観光施設）を営む家庭であった。その家庭におけるインタビューにて、土族の伝統的祭礼として「花児会」の話題が出たが、その「花児会」さえ、資料3に示すように、すでに観光メニューに載せられていた。また、キャンセルになった9月5日の循化県清水郷は天池（正式名称は孟達天池、国家級自然保護区である孟達自然保護区内にある）の入り口にあり、ここを訪れるツアープログラムとしてQMA41貴徳黄河灘・孟達生態旅游がパンフレットには掲載されていた。

資料1 青海登山協会による今回調査の旅

9月2日 北京－西寧

昼食後塔爾寺参観。

9月3日 調査対象：青海湖甲乙村（藏族：共和県青海湖青海湖畔を居住地とする）

観光メニュー：日月山，青海湖。

9月4日 調査対象：互助（土族，中国のみに存在する少数民族の自治県）

観光メニュー：土族民俗村

9月5日 調査対象：循化県清水郷（薩拉族：中国のみに存在する少数民族の自治県）

観光メニュー：拉木峡，天池

9月6日 調査対象：大通県（漢族）

観光メニュー：夜，汽車にて西寧から拉薩へ

資料2 パンフレット掲載の観光プログラム1

青海風情之旅

青海省は青藏高原に立ち、平均標高が3千以上になる。省名は省内に抱える中国最大の湖である青海湖に由来する。観光資源は極めて豊富である。風光明媚の青海湖，鳥島，チベット仏教の各寺院－塔爾寺，チベット族，土族，モンゴル族，サラ族，回族の多彩な民族風習等がより多くの観光客を魅了している。

日数	起止地	距離	交通	活動内容	食宿泊地
1	-北京		飛機	入境	新北緯飯店
2	北京-西寧		飛機	博物館	青海賓館
3	西寧-塔爾寺-西寧	100	バス	塔爾寺 北禪寺	青海賓館
4	西寧-青海湖	160	バス	日月山 藏族家訪	信越山莊
5	青海湖-鳥島-青海湖	310	バス	鳥島	信越山莊
6	青海湖-海晏-西寧	240	バス	金銀灘 清真大寺	青海賓館
7	西寧-李家峽	160	バス	坎布拉(森林公園)	李家峽賓館
8	李家峽-互助-西寧	230	バス	土俗村	青海賓館
9	西寧-北京		飛機	市内観光	新北緯飯店
10	北京-		飛機	出境	回国

資料3 パンフレット掲載の観光プログラム2

六月六日花児会

“花児”または“少年”は、わが国西北地区に広く伝えられる民謡である。花児会では、恋人たちが「対歌」の形式で互いに情を表現し、相手に対しその才を披露する。“花児”の内容は多彩であり、曲調は質朴で郷土色に満ちている。青海は“花児の海”と呼ばれ、毎年陰暦4月から6月に、各地で花児会が次々に開催される。そのときには、丘の上、田の中、小川のほとり、至る所が“花児”の舞台となる。

日数	起止地	距離	交通	活動内容	食宿泊地
1	-北京		飛機	入境	新北緯飯店
2	北京-西寧		飛機	市内観光	青海賓館
3/4	西寧-大通	50	バス	花児会	大通賓館
5	大通-西寧	80	バス	北禪寺, 清真寺	青海賓館
6	西寧-塔爾寺-青海湖	180	バス	塔爾寺, 青海湖	信越山莊
7	青海湖-西寧	240	バス	金銀灘草原	青海賓館
8	西寧-北京		飛機	市内観光	新北緯飯店
9	北京-		飛機	出境	回国



写真1 藏族牧畜地区風景



写真2 藏族インタビュー風景

3. 青海の貧困観光

(1) 貧困の商品化

先に、援助ツーリズムにおいて「貧困の文化」が観光対象となり得るという、葛野の指摘をあげた。今回の我々の体験は、旅行社が介在しツアーのプログラムが設定される時、「貧困」さえ観光商品として陳列されることを示している。もちろん、ツアープログラムが売ろうとしているのは青海風情であり、直接的に貧困を商品化しようとしているわけではない。だが、貧困地区を見たいと望む奇妙な研究者たちに対して提示されたものも、ツアープログラムそのままの少数民族の暮らしであった。

青海において少数民族の暮らしが、そのまま青海風情を満喫できる観光商品となるのは、その生活が十分産業化されないままに保持されているためである。通常、行われる加工作業、すなわち観光地としての整備や文化を見せるための工夫は、藏族地区においては全く施されていなかった。土族地区においても、個人・民間単位の投資による小規模な農家楽、観光村が設置されているだけであり、ごく初歩的な開発であることが見て取れた。

全く開発がなされていない藏族地区の生の生活が、なぜ観光商品となり得るのかを考えるならば、観光客が「自然とともに生きる生活」に感動したり、「近代とは異なる言説や文化表象」に感心したり、「豊かではないが素朴な暖かさ」を感じ、満足すればよいのである。この意味で、少数民族観光そのものが、もともと観光客のオリエンタリズム的な「ロマン主義的まなざし」に支えられるものである。

(2) 貧困の商品価値

先にオーセンティシティについての議論で示したように、より近代化の度合いが低いこと、産業化の度合いが低いことは、少数民族観光にとっては、往々にしてオーセンティシティの高さを示す、本物の指標として利用される。青海の場合、観光化のための加工作業が極めて小さい分、秘境性の高さという希少性のレベルにまで引き上げられる。

青海登山協会は、自らの旅行社の扱う旅行が通常の観光旅行ではなく冒険、探検色の強い、特殊なものであることを強調するが、これ自身が青海観光の、オーセンティシティの高さの主張である。この方針は、旅行社にとっては、一般の観光、すなわち大衆観光との差別化を図り、自社のツアーの価値を高め、単価を上げることにつながる。この意味で、青海省の観光開発の遅れが、特殊な旅行商品のブランド化の役割を果たしており、これを扱う旅行社にとってはむしろプラスにさえなり得る側面がある。

実際、劉は青海省の現状における優勢産業として特色農牧業と特色旅游業をあげており、これが青海登山協会・国際体育旅行社という一旅行社の企画に限ったことではなく、青海省の観光全体を特色づける傾向であることが理解できる（劉, 2001, 25）。

しかし、青海省において登山や探検とフィックスでまなごしをむけられる少数民族は、時として、積極的に観光産業に従事していないにもかかわらず、そのまま観光商品として観光客に提示されることになる。これは、彼らは観光客に観光化されない生の生活を開示することであり、そこでは近代的意味においてより貧困である方がリアルであり、観光商品としての価値が高まるという皮肉な側面を持つのである。

おわりに

青海の観光においては、近代的意味での「貧困」が民族観光におけるオーセンティシティを高める装置として働いている現状を指摘してきたが、当のまなごしを向けられる人々が自分たちの「貧困」をどのように捉えているのかについて、藏族のケースを通して、最後に示しておく。

藏族の家庭を訪問した際、少し離れた場所に寺院が見えた。この寺院は8月、すなわち調査の1ヵ月前に完成したばかりのものであった。藏族の人々の生活において宗教は重要な位置を占めている。その文化伝統として、物質的な生活よりも宗教を重視し、寺院へできるだけ多くの布施を行い、精神的満足を得たいと思う傾向があるという⁽³⁾。こうした文化伝統に照らし合わせた場合、彼ら自身の価値観において、自分たちの村に寺院を建立することが叶ったことは貧しいのであろうか。

近代的指標においては、個々の生活は相変わらず貧しいままであるが、寺院の建立が叶ったという意味では、近年、いくばくかは豊かになったのであろう。言い換えると、彼らの豊かさの享受方法が近代的指標とは異なるために、観光客あるいは当該地域の外部者たちは、それを却って見識の貧困等として認識し、貶めてしまうのかも知れない。その構図を少し整理すると、以下のようになるであろう。

省政府や彼らの中の若い知識人層などは、近代的指標において豊かになることを切望している⁽⁴⁾。青海の観光産業は、彼らの近代的指標における貧困を稀少性のある商品として扱う。遠来の観光客は、「貧しいけれども、素朴で暖かい世界」というロマンを彼らに投影する。集団としての彼ら自身は、近代的指標とは異なる方法において豊かさを享受する。

冒頭に、山下の「観光の民族誌は、世界資本主義というマクロなシステムと具体的に観光が展開されるホスト社会のミクロなシステムの「コンタクト・ゾーン」、あるいは接合点を研究することになるのである」という引用を示したが、青海省の観光の一断面からは、以上のような形で藏族社会と外部社会の接合点が形づくられていることが理解できる。



写真3 新しく建立された寺院

なお、本稿は『日中社会学会ニューズレター』No.48に掲載された調査ノート「貧困観光考—青海省調査から—」をもとに加筆、修正を行ったものである。

注

- (1) 青海省での調査参加者は中村則弘（愛媛大学）、陳捷（愛媛大学）、首藤秋和（兵庫県立大学）、唐燕霞（島根県立大学）、湯青川（青海大学）である。
- (2) アーリ・ジョン『観光のまなざし』、1995年、法政大学出版局参照。
- (3) 2006年12月9日に行われた日中社会学会冬季研究集会における次仁央宗の報告「藏族文化的伝統思维与現代西藏社会経済発展」を参照した。
- (4) 村に一つある中学校は公立ではなく、スウェーデン人の篤志家の寄付によって開かれたものである。この人物を招へいした村の青年幹部達は、近代化を求める層であると言えるだろう。

参考文献

- 東 美晴 2006 「貧困観光考—青海省調査から—」『日中社会学会ニューズレター』No.48
- 葛野浩昭 1996 「観光旅行の諸類型—疑似体験としての観光旅行」『観光人類学』山下晋司編、新曜社
- 橋本和也 1999 『観光人類学の戦略 文化の売り方・売られ方』世界思想社
2003 『観光開発と文化 南からの問いかけ』世界思想社
- 山下晋司 1996 『観光人類学』進曜社
- 李明徳他 2004 「中国旅游規画的發展与創新」『中国旅游發展：分析与予測2002～2004』張広瑞他編、社会科学文献出版社
- 劉 鋒 2001 『西部旅游發展戰略研究』中国旅游出版社
- Urry Jhon 1990 *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Society*
(アーリ・ジョン、1995、『観光のまなざし』加太宏邦訳、法政大学出版局)